# 宗祖 法然上人 800回大遠忌

通信 10

平成23年4月25日(月)～5月1日(日)

総本山 永観堂禅林寺

# 御親教

いよいよ来年四月に迫ってまいりました、宗祖法然上人の８００回大遠忌。半年前にこの京都で記念の法要をこのように盛大につとめさせていただくことができました。

お釈迦様は、人間がこの世に生れて、誰もがさけることのできない四つの苦しみを説いておられます。生きる苦しみ、老いてゆく苦しみ、病をえる苦しみ、この世と別れねばならぬ苦しみ。生老病死の世の中でネ。こういう言い方があるのです。「生まれた時は喜ばれ、老いては嫌われ、病んでは飽きられ、死んでは忘れられーであってはならない」。

つまり、せっかくこの世に生を受けた身であるならば、真実の幸せ、それに出会わないことには生まれてきたかいがないではないか、と。そのためにお釈迦様は「四恩」ということをお説きになっています。一つは、父母から受けた恩、一つは、じいちゃんばあちゃんを含め、兄弟も含め、先生も含め、友達も含め人々のご恩、生涯に出会ういろいろな人々から受けるご恩、衆生の恩といいます。そして天地自然の恩。最後に大切なのが「三宝のご恩」。三宝とは佛、法、僧。仏様とその教えとそれを信じて実践する人をいいます。この佛法僧に私どもはひたすら感謝をささげていこうではないか。

佛とは、わが宗門にとりましては、阿弥陀如来であります。法とは、その阿弥陀如来の御救いを懇切にお説きになったお釈迦様の無量寿経であり、観無量寿経阿弥陀経であり、いわば浄土の三部経であります。そして僧とはまぎれもなく、そのお念佛のお教えをしっかりと打ち立てられた法然上人にほかなりません。

佛様とその御教えとその御教えを広められた法然上人と、その三つの宝に対して私どもが心の底から「ありがとう」「申し訳ない」「どうぞみなさんお幸せに」そういう様々な美しい言葉を一つにしたのが「ナムアミダブツ」という佛さまのお名であります。

この名を唱えてくれ、この名を呼んでくれ。「ナムアミダブツ」という我が名を呼んでくれよ。そのように阿弥陀様が私どもによびかけていらしゃるのだよ、と法然上人がお示しになったわけです。

私どもができる恩返しとはなにか。それは「南無阿弥陀佛」とお念佛を唱えることにほかなりません。それが宗祖に対する恩返しであり、如来様のお慈悲に対する報恩のお念佛であります。そしてもうひとつ、恩返しとともに、恩送りということもおすすめします。

恩送りは、自分が受けた恩を次の世代に送ってゆくのです。親からしてもらった大事なことは、子供に送るのです。じいちゃんばあちゃんにしてもらってうれしかったことは、孫に送るのです。先生や、あるいは社会から受けた恩ならば、ボランティアという形で社会に還元していくのです。これを恩送りといいます。

何よりも尊い恩送りは、私どもが先祖から受け継いだこの「南無阿弥陀佛」という浄土宗禅林寺派のお念佛の尊いお教えを次の世代へ、さらに次の世代へと伝えていくことです。８００回の御遠忌が終わったらさらにその先の８５０回、９００回、永遠に伝わっていくように、この阿弥陀様、その教えをお説きになったお釈迦様、法然上人、そういう方々の御恩に御報いする恩返しになるのではないかと思います。

浄土宗西山禅林寺派管長総本山永観堂禅林寺法主　中西玄禮猊下の御親教

# 「法然上人と今、すべてのいのち」京都大会

# 京滋阪奈の檀信徒八百人が集い、法然上人の世界に浸る！

平成二十二年十月十三日（水）、京都テルサにおいて法然上人800回大遠忌記念「法然上人と今、すべてのいのち」京都大会が開催されました。八百人の聴衆は、舞台でくりひろげられる法然上人の教えの尊さにふれ、念仏する歓びに浸りました。

記念大会が開かれた南区の京都テルサ

## 大遠忌祥当につながる大会となる

京都大会が開催された京都テルサは、京都駅から南へ徒歩十五分のところにある府の総合プラザ。ここに京都、滋賀、大阪、奈良の住職、寺庭婦人、一般檀信徒八百人が集い、法然上人にまつわる法話と法要と琵琶による語りで、三時間あまりのドラマが展開されました。

当初観客の入りが心配されましたが、ふたを開けてみると受付開始前に聴集が押し寄せ、開演時間には場内ほぼ満員となり、その数八百人となりました。

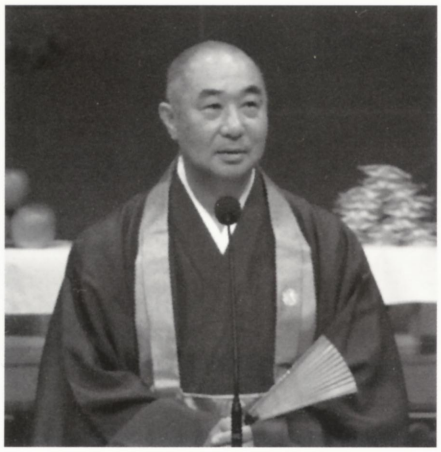
開演に先立ち、京都市融雲寺住職三輪恭明師による「一枚起請文」の発声練習がおこなわれました。最後に「法然上人の御命と、今に生きる我々の命をつないでくださる大切なご遺訓だと思います。この大会を契機に、皆様の心に一枚起請文が刻み込まれることを願っています。」と締めくくりました。

続いて、寺庭婦人によるコーラス「三帰依文」と「法然上人頌」が披露されました。

「ゴーン」と永観堂の鐘が三打打ち鳴らされ、舞台上手に法然上人像が映しだされ、中央の六字の名号にスポットライトが当たると、舞台下手に柏木宏之アナウンサーが登場し、開会を告げ京都大会が始まりました。開会に先立ち、このたび岡山から比叡山まで二七五キロを十五回にわたって歩かれた「法然上人を歩く旅」の一行が紹介され、旅に同行した文殊菩薩像が祭壇に安置されました。

## 念佛するところみなこれ予が遺跡なるべし

宗派を代表して、久我儼昭宗務総長が次のように挨拶されました。



久我儼昭宗務総長の挨拶

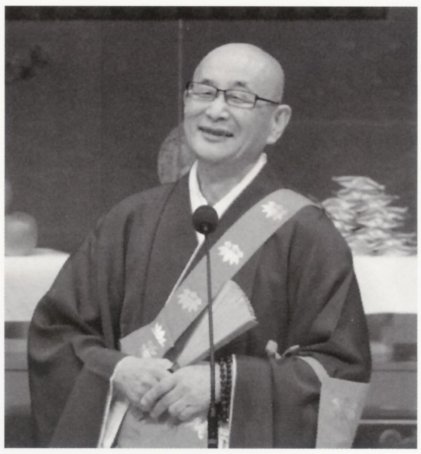
『本日、ここに宗祖法然上人八百回大遠忌の記念事業であります「京都大会」が「法然上人と今、すべてのいのち」のテーマのもと、盛大に開催されますことは大きな慶びであります。

わが派は、法然上人のご遺徳を顕彰し、お念佛の輪を広げるべく記念大会を全国で開催してまいりました。私たちの日暮しはどこにいても、何をしていても、阿弥陀さまとしか呼びようのない大きなおいのちの中に、抱きかかえられていることに気付かせていただかねばなりません。生活の中のお念佛でなく、お念佛の中に生活するという信仰に目覚めていただきたいのです。

法然上人がお亡くなりになるとき、弟子のひとりがお師匠さまはお寺をひとつもお建てになっておられません。どこを御遺蹟と致しましょうか、と尋ねたとき「念佛の声するところすべて私の遺蹟である」とお答えになりました。今、この会場が法然上人の御遺蹟です。

本日「京都大会」に参拝の皆様にしっかりと上人のお心を受け止めて頂くことができたならば幸甚です』と開会の言葉を述べられました。

最初の法話は、福井県安泰寺住職佐々木憲乗師が「人生のいきがい」と題して次のようにお話になりました。



福井県安泰寺住職　佐々木憲乗師の法話

## お念佛の信仰をいきがいに

宗祖法然上人御歌に示されて宣わく

**柴の戸に明け暮れかかる白雲を**
**いつ紫の色とみなさむ**

みなさん、ご自身の人生を生きてこられて、どのような感慨をもって生きてこられたのでしょうか。私は十年区切りで自分のいきがいがかわってきたなァと思っています。子供のころのいきがいは、もちろん遊びでございます。十代は、親は学問がいきがいであってほしいと願うのでしょうネ。遊びほうけておりました。おかげで、大学受験に失敗しました。

二十代になりまして、初めていきがいが変わりました。なんとか京都の大学を出させていただき、福井の故郷に帰ってまいりました。

親が就職を決めてくれました。寺に坊さん二人もいらんから、おまえは働きにいきなさいと。たくさんの社員がいて、やはり恋をして、三回恋をして、三回破れ四度目の失恋の時に、二十代の生きがいは恋なのかなあと思いました。

二十代の後半、見合い結婚で妻をむかえることができました。子供が授かりましてネ。一番喜んでくれたのが父でございました。名前はもう決めてある。「一乗」にするというのです。生まれて三日目、父母と私と三人で息子に会いに行きました。病院で息子の顔を三十分ながめて、家内の部屋に行きました。「元気な赤ちゃんだョ」と家内に報告して、お寺に帰って三十分もたたないうちに、病院から電話がかかってきました。「一乗君のお父さんですか、実は黄疸の症状が出ていて、だんだん症状が強くなり、この病院では手に負えない。今から県立病院の未熟児センターに搬送します。血液の交換ということも考えられるのでお父さんも病院にきてください。」

病院へかけつけると、先生は「お父さん覚悟しておいてください。」とおっしゃるんです。先生の手をつかんで、「家内は帝王切開までして生んでくれました。まだ、息子の顔も見ていない。おっぱいもやっていない。お願いだから、私の命が縮まっていいから、この子に命をいただきたい。」とお願いしました。先生は「やれることはすべてやってみましょう」とおっしゃって、私の血をぬき首をかしげるだけなんです。

白衣を着て帽子をかぶり病室に入りました。あの息子は体中まっ黄色。はれぼったい体になって、管が何本も通っている。先生が来られて、「できることは、すべてやったけれども、この子の命はもう数分ももたない。おとうさん、そばにいてあげなさい」五分もたたないうちに息子は最後の息をすうっとはいて亡くなりました。（中略）

三日間しかいなかった息子が、大事なことを私に教えてくれました。三十代のいきがいは子育てである。

四十代になりまして、お蔭さまで娘と男の子を授かりました。子供が授かりますと、親は欲が変わってきますナ。子供のために財産づくりがいきがいになってくるのです。

五十代になりますと、少し世の中のお役に立ちたいなァといういきがいがでてきます。

六十代になりますと、いきがいがすとんと変わってこなければいけないのではないでしょうか。

法然上人の場合、どうだったでしょう。九歳のときから、信心がいきがいだったのではないでしょうか。九歳のときに、父が殺され叔父の観覚上人の菩提寺に入れられて、十二歳のときに比叡山に登られるのです。

一二一二年、建暦二年正月二十五日、八十歳で入滅されるのですが、その数年前に摂津の勝尾寺で詠まれたのが、先ほ

勤行式による特別記念法要

どの御歌です。

**柴の戸に明け暮れかかる白雲を**
**いつ紫の色とみなさむ**

山の中腹の小さなお堂で、朝な夕なお念仏を唱えておられる法然さま。振り返りますと柴の小枝で作った戸に、谷底から朝な夕な白い雲がふわっとわきあがってくるではありませんか。その白い雲がいつになったら、私をお迎えにきてくださるのでしょうか。阿弥陀様の乗られた紫の雲の色に、いつ変るのかなあと歌われた歌です。

私どもはなかなか法然さまのようにまいりませんが、せめて六十代になりましたならば、念仏の信心信仰がいきがいとなってこなければいけません。

帰るときは、来るときよりも美しく。みなさん、お浄土にお帰りになるとき、美しく帰って頂きたいと願うひとりなのです。

続いて、山口市長寿寺住職中村隆芳師が「大悲心の中に」と題して、次のようにお話になりました。

## 法然上人と今、すべてのいのち

この特別記念法要のタイトルに「法然上人と今、すべてのいのち」の言葉が使われています。「今、すべてのいのち」という言葉の中に、今現在私どもの人間社会に向けた、大切なメッセージがこめられています。いのちの尊さ、いのちの豊かさ、いのちのはかなさ、いのちのもつ不思議さ、そういうものに思いをいたしいのちの尊厳というものをもっと大切にする社会であって欲しい。今、人間社会が向かっている方向、間違ってやいませんか。お金、お金、経済第一主義。あるいは、自分さえよければよいという個人主義。あるいは、自分の国さえよければ他の国はどうなってもよいというナショナリズムといいますかネ。そういう間違った方向から、本来人間があるべき姿を取り戻すには、この法然上人の心、いのちあるすべてのもの、生きとし生けるものの心の救済、それも平等な救済を願われた法然上人の御心に学ぶべきではありませんか、というメッセージがこめられていると思います。

私たちは、この奇跡ともいうべきいのちをいただいてここに存在しています。

それもこの自分という個性を持った人はたった一人です。

そのたったひとつの個性を、縁あってこの世に頂いて、私で言うならば七十四年間この世に存在していたという事実、これは何物も否定できない厳粛な事実です。今与えられた命を一生懸命生きている。私は今ここに存在している。私はただただ生きているというだけで、人生の価値のほとんどをまっとうしているのだと、私はそう思っています。

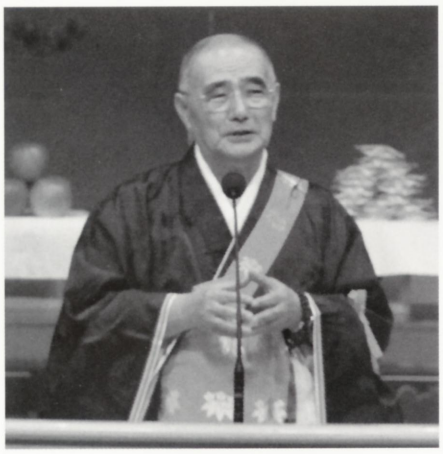
私たちがここに生きているということは遠い過去世から、ありとあらゆる因と縁とが混じり合い、重なり合って、今はじめて私というものがここに存在している。遠い過去世から、いのちの川のようなものがつながってきて、今現在は、このいのちを私どもが受け持っている。

法然上人のお言葉に「まこと大悲誓願の塵劫なること、たやすく言葉にて述ぶべからず。心にとどめて思うべきなり」とおっしゃっている。阿弥陀様の大きな慈悲の心の深さ広さを、人間が言葉で言い表すべきじゃない。それはそれぞれが心にとどめて、ありがたい、かたじけない、もったいないと感じとるものです、とおっしゃっている。

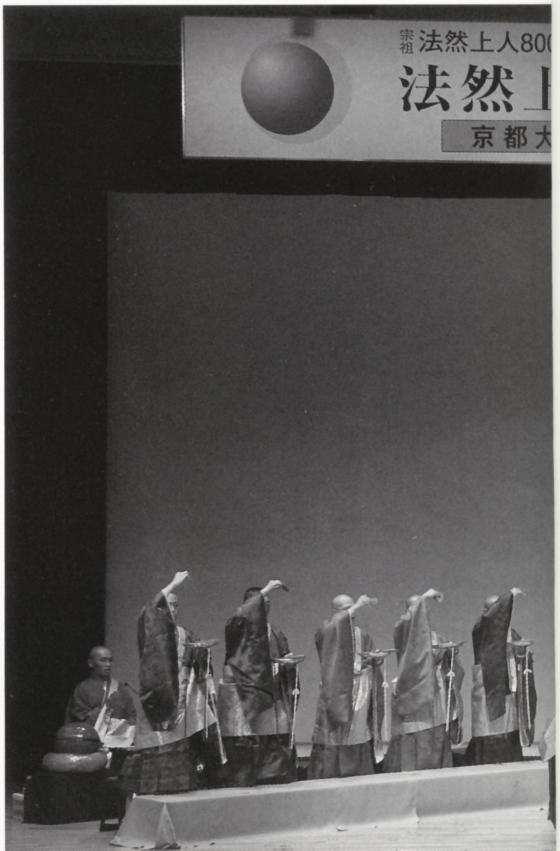
法然上人の阿弥陀様への絶対の帰依、絶対の信仰心の深さ、法然上人の胸にある阿弥陀様のお姿というものが、伺い知れると思います。

佛様の知恵、佛様の力、佛様の慈悲の御心、これは私ども人間にはなかなか覚知できるものではありません。私ども凡夫には分かるべくも有りませんが、凡夫は凡夫なりに、阿弥陀様はどんな御方なんだということは、この胸にいただきたいと思います。

私たちがすべてをお預けする阿弥陀様、これは言うまでもなく私どもの信仰の世界です。宗教の領域ですネ。宗教がなんの為にあるかと言えば、私どもの人生がいかによりよく生きられるかという為にある。私どもの人生がいかに心豊かに生きられるか、いかに堂々と死んでいけるか、そのために宗教はあるのです。ですから私どもの信仰の対象の阿弥陀様は、私ども人間をはるかに超越された方なんだ。私ども人間が、一歩でも二歩でも近づきたい、凡夫にとってまさに理想のお



山口市長寿寺住職中村隆芳師の法話



姿、それが阿弥陀様です。

阿弥陀様は、もし人間が私の名前を呼んで救われないようなら、私は佛にならないと誓われた。人間の救済と我が身の成仏とが同時であるというのはいうまでもありませんが、人間が人間として存在することが、自分が存在すること。言葉を変えて言えば、他者と自分とは一体のものなんだと。他者が存在するから自分というものが存在するのだと。佛教の世界では、これを「不二の思想」と言います。分けることのできない不二の思想の根底は言うまでもなく慈悲のお心です。慈悲の心は悲しみを慈しむと書きますから、人さまの悲しみを自分の悲しみとして悲しむ。人さまが涙するときに、自分のこととして涙する、そのときお互いのなかに小さいけどあったかい灯がともる。それが慈悲ですネ。慈悲の心が具現化されたというか、姿となられたのが阿弥陀様ですネ。

我々が住んでいる地球とか宇宙というものは整然として運行されています。そこには、宇宙の大法則、絶対の真理があります。この絶対の真理を仏教では「真如」あるいは「如如」と申します。

その「真如」の世界からこられたので、これを如来様と呼びます。如来というのは、インドのサンスクリット語で「タタギャータ」という言葉の本来の意味は、すべてのものの始まりとという意味です。物理学的に言いますと、時間と空間の生みの親とでも言いますか、イメージとしてはよく物理学者が使うビッグバーンですかナ。パッと爆発して今宇宙が広がっている。そういうイメージなんですが、阿弥陀様の発せられる無量光という影のない光、無量光という知恵の光が、すべてのものを照らし、すべてのものを育み、すべてのものを救っている。阿弥陀様の光、それは時間的に言えば永遠のものです。無限のものです。

私ども人間は限りがあります。時間的に言えば有限のものです。その時間的有限のものから、時間的無限のものへの限りなき信仰。これが私どもと阿弥陀様との関係です。ですから、真実、絶対の真実がお姿となられたのが阿弥陀様なんだということ。もうひとつは、過去も現在も無数の人間を救ってこられた事実が報われて、阿弥陀様のお姿になられたと思っております。

お念佛の教えも、私どもがお念佛を申すこともそうです。理論ではありません。私たちが南無阿弥陀佛とお唱えしたとき、その場所にお出ましになり、そこで働いてくださる佛様のお力によって、この私たちが身も心も大きく変わっていく、いわゆる宗教的な大転換がここで生じる。私たちの　人間のもっている業というものを中心にガラッと転換する。

ア、この私はなんとおろかな、おろかな、なんと迷いのおおい、なんと強欲な、どう考えてもこの私は地獄に行くより仕方がないなあと思い定める。もはや自分に絶望し、まっさかさまに奈落の底に落ちようとするそのときに、自分の声なのか、人さまの声なのか「南無阿弥陀佛」の声を聞いて、はっと目を開けてみるとそこは佛様の大きな慈悲の光につつまれている、大悲心の中にいる自分に気がつく。もっと言いますと、主体と客体とが転倒するのです。主体はお念佛をする私たち人間ではありません。主体は私たちがお念佛を申し上げたときに、そこにお出ましになり働かれる佛様が主体で「ナムアミダブツ」と声を出さしていただいてるほうが客体となる。こういう主客の転倒がお念佛によっておこるのです。ですから、私どもが救われてあるということは、私どもがお念佛をする姿そのものなんだということです。ア、この私は救われている、ありがたい、かたじけない、もったいない、そう思ったときに、さらにまた声を出して「南無阿弥陀佛」と唱え、念佛を相続する、それがお念佛を喜ぶ日暮しでございます。ありがとうございました。

## 心ひとつに南無阿弥陀佛を

次に浄土宗西山禅林寺派管長総本山永観堂禅林寺法主中西玄禮猊下と法事部による特別記念法要が荘厳に営まれました。勤行式による読経二十五分間、場内静かな雰囲気に包まれ、よく整えられた声の調子、荘重な響き、統一された所作の美しさ、会場いっぱいに念佛の声が響き、神々しい雰囲気に満ち溢れ、聴集は法悦ともいえる世界に浸たっていました。

読経が終わって中西玄禮猊下の御親教をいただきました。

よく鍛えられた見事な調子で唱える法事部

# 舞台と観客が一体となり、法然上人の世界を現出！

## 八百年前に立ち返り語られる

第二部は、古屋和子さんの琵琶で語る「法然上人物語」。

「祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響き あり～」と琵琶の音に合わせて語りはじめられる。勢至丸の誕生から、父漆間時国と明石定明との確執、父の臨終と遺言、母と別れ比叡山へ、比叡山での勉学と心の葛藤、観経疏との出会い、そして法然上人四十三歳。

「ただ南無阿弥陀佛とお唱えなされ、阿弥陀さまは必ず浄土へ導いてくださる。すべてをおまかせして、ただ一心に南無阿弥陀佛と唱えればよいのだ。ただ、南無阿弥陀佛と。」と古屋さんが語ると間髪をいれず、観客席から「南無阿弥陀佛」つぎつぎと南無阿弥陀佛の声があがる。そして古屋さんの声がかぶさるように「専修念佛は燎原の火のように燃え広がった」とつづき、舞台と観客とが一体となって、南無阿弥陀佛の世界へ導き、そして入滅の場面で「それから二日後の建暦二年正月二十五日、法然上人は入滅した。」というところで、十人の観客が同時に立ち上がり、十念を唱え、舞台と観客とが一体となって、この法然上人物語を盛り上げ、成功へと導きました。

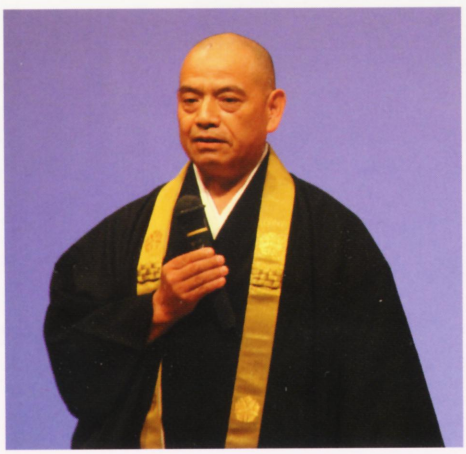
古屋さんが語り終えて、満場の拍手がなりやまぬうちに、法事部が舞台に登場して、法然上人のご遺訓「一枚起請文」を会場全体で唱えました。

琵琶で語る古屋和子さん

最後に、浄土宗西山禅林寺派京都府宗務支所長恵光寺住職岸野亮淳師がつぎのように閉会の辞を述べられました。

本日もいろいろな方のご協力で、いっしょに住き日を迎えることができました。万腔の謝意を申しあげたいと思います。

すばらしい時間をいただいて、今日から新しい生き方をしていきましょう。また、来年は法然上人８００回の大遠忌がありますので、またお目にかかりましょう。心から感謝の言葉を述べ、おわりの挨拶とさせていただきます。



閉会の辞を述べる岸野亮淳京都府宗務支所長

# 「法然上人を歩く旅」ご遺徳を顕彰し比叡山に到達！

## いよいよ最終目的地比叡山へ

平成二十二年十月三日(日)、午前九時十分に叡電修学院駅に集合。天気予報によると午後から雨。何とか頂上に着くまでもってくれと祈りながら出発。白河通りに出て北へ、音羽川との交差点を右へ折れ川を遡る。きらら橋を渡り左手の山道に入る前に全員四十六名の記念写真を撮る。ここからがきらら坂です。入り口に「この坂は最澄、法然、親鸞、日蓮、道元が通った」と記され、急坂になる。

法然上人を歩く旅の登攀組46名

きらら坂は道幅が狭く、急勾配で歩きにくく、息を弾ませ、汗を流し山肌に張り付くように登っていかなければなりません。四十分も登ると「水飲対陣跡」と記された石碑に着きました。後醍醐天皇の近臣、千種忠顕が足利直義軍と戦ったとき陣を引いたところです。ここで休憩し全員が登ってくるのを待ちます。みんな汗びっしょりになり息を切らし、口々に「しんどい」を連発。水を補給して十分休養をとり、再び登攀を続け四十分も歩くとケーブル比叡駅に到着。すでにケーブルで登ってきた十二名と合流。総勢五十八名となる。京都市内が一望できる広場に集まり、比叡山の空気を吸い、後半にそなえる。ケーブル比叡駅からスキー場跡を通り、四十分も歩くと延暦寺エリアに入ってきます。根本中堂をはじめ、国宝殿、大講堂、戒壇院、東塔、阿弥陀堂など林立している。まず、法然上人が得度をして、「法然上人得度御旧跡」の碑がある法然堂を訪ね、法楽一会のあと昼食。法然堂を管理されている両国寺さん、堂守のご夫妻のご好意により、日本茶とコーヒの接待をうける。

「大講堂」での法楽一会

午後、大講堂に参る。比叡山で修行して一宗の開祖となられた法然、親鸞、榮西、道元、日蓮などの等身大の尊像がまつられている御堂に入り、法然上人像の前で中西玄禮猊下のもとに法楽一会を行い、「法然上人を歩く旅」の無事完了を報告し謝意をのべる。

さらに、根本中堂へ行き、不滅の法灯に輝く薬師如来像を拝み、比叡山延暦寺の参拝を終える。

十四時三十分に延暦寺バスセンターからバスで四条大宮の「養老の瀧」へ向かう。

## 「法然上人を歩く旅」完結を祝う会

「法然上人を歩く旅」は、平成十八年十月九日法然上人のお生まれになった岡山県誕生寺を出発して、丸四年をかけて二百七十五キロを十五回にわたって歩き、去る十月三日比叡山に到着。見事旅を完結いたしました。それを祝って祝賀会を開催しました。開催に先立ち、全員の写真撮影をおこない、続いて久我儼昭宗務総長より開会の挨拶をいただき、ひとりひとりに歩いた距離が記入された「修了書」が渡され、高谷哲朗教学部長の乾杯の音頭で祝宴が始まりました。祝宴中、思い出のアルバムがプロジェクターで投影され、50マイル賞・100マイル賞の抽選会がおこなわれ、龍野の詩人三木露風の「赤とんぼ」を全員で合唱してしめくくりました。

## 法然上人を歩く旅

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第一回 | 二〇〇六年 十月九日 | 誕生寺→津山 | 十六・五キロ |
| 第二回 | 二〇〇六年 十二月三日 | 津山→林野 | 十七・〇キロ |
| 第三回 | 二〇〇七年 三月十一日 | 林野→美作土居 | 十五・〇キロ |
| 第四回 | 二〇〇七年 五月十三日 | 美作土居→播磨徳久 | 一八・〇キロ |
| 第五回 | 二〇〇七年 九月三十日 | 播磨徳久→千本 | 一六・〇キロ |
| 第六回 | 二〇〇七年 十二月九日 | 千本→本竜野 | 一六・五キロ |
| 第七回 | 二〇〇八年 三月九日 | 本竜野→姫路 | 十九・〇キロ |
| 第八回 | 二〇〇八年 五月十一日 | 姫路→東加古川 | 二三・〇キロ |
| 第九回 | 二〇〇八年 十二月十四日 | 東加古川→舞子 | 二二・七キロ |
| 第十回 | 二〇〇九年 三月八日 | 舞子→六甲道 | 二三・五キロ |
| 第十一回 | 二〇〇九年 九月二十七日 | 六甲道→北伊丹 | 二一・九キロ |
| 第十二回 | 二〇〇九年 十二月十三日 | 北伊丹→高槻 | 二一・一キロ |
| 第十三回 | 二〇一〇年 三月七日 | 高槻→桂川（久世） | 十七・八キロ |
| 第十四回 | 二〇一〇年 五月十六日 | 桂川→修学院 | 十八・九キロ |
| 第十五回 | 二〇一〇年 十月三日 | 修学院→比叡山 | 八・七キロ |

発行所
宗祖法然上人800回大遠忌記念事業事務局
〒六〇六－八四四五 京都市左京区永観堂町四八
電話 〇七五－七六一－〇〇〇七
FAX 〇七五－七七一－四二四三
Eメール zenrinji@eikando.or.jp
二〇一〇年十二月一日発行